



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第61号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2015-02-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73616
Type	journal
File Information	DRFmonthly_61.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第61号

No.61 Feb. 2015

【特集1】 祝！ 月刊DRF5周年！

【特集2】 2014年第2次OAKリポジトリ運営機関協議会ワークショップレポート

【告知】 機関リポジトリ新任担当者研修会が開催されます！

【連載】 かたつむりとオープンアクセスの日常



祝！ 月刊DRF5周年！



平成22年2月に創刊した広報誌「月刊DRF」は、DRFの活動や関連イベントの発信にとどまらず、機関リポジトリ（IR）やオープンアクセス（OA）に関する情報の共有・議論の場として成長を続けてきました。振り返ってみると、IR/OAのこれまでとこれからがちょっと見えてくるかも？



関心の高かった号は？

月刊DRF

ダウンロードランキング

BEST 5

1位

(4797DL)



第26号増刊 (2012年3月)

- ・【特集1】 オープンアクセス出版とは
- ・【特集2】 第5回SPARC Japanセミナー 2011「OAメガジャーナルの興隆」

2位 創刊号 (2010年2月)



(2768DL)

- ・【特集1】 DRF新体制が発足！
- ・【特集2】 DRF6を開催しました
- ・MLの話題から～未来の論文の形？～雑誌Cellの提案
- ・参加機関紹介～OAK：帯広畜産大学学術情報リポジトリ

3位 第13号 (2011年2月)



(2754DL)

- ・【特集1】 8人の女たち
- ・【特集2】 オープンアクセスイベントレポート3連発
- ・あなたのお仕事何ですか？

4位 第42号 (2013年7月)



(2661DL)

- ・【大特集】 オープンアクセス・サミット2013 レポート：学術情報のオープン化に向けて～現在の到達点と未来の展望～
- ・【新連載】 今そこにあるオープンアクセス 第1回 ハゲタカ出版社はゴールドOAの夢を見るか？

5位 第12号 (2011年1月)



(2618DL)

- ・【特集】 新生DRF一周年を迎えて
- ・参加レポート：「機関リポジトリのアクセス数をいかに数えるか？～カウント方式の標準化に関する国際会議～」

「学術情報流通の改革を目指して 4～大手出版社が考えるビッグディール後の契約モデル～」

・あなたのお仕事何ですか？

上位5位はこのような結果に。次点が、セルフ・アーカイブによるOAというアイディアの原初と言えるハーナッド氏の転覆提案（“THE SUBVERSIVE PROPOSAL”）を特集した、[第20号 \(2011年9月\)](#)でした。

全号を通して、学術情報流通の変化に関するテーマを扱った号が特に多くアクセスされており、グリーンOAだけでなく、ゴールドOAを扱った号も、高い関心を集めています。ダウンロード数トップだった第26号増刊（2012年3月）では、ゴールドOAの新たな展開をもたらし、OA出版のめざましい発展に大きな影響を与えた、OAメガジャーナル「PLOS ONE」誌出版代表P. ビンフィールド氏（現在は「PeerJ」主宰）を招いたイベントのレポートを掲載しています。

その「PLOS ONE」誌の気になる最近の傾向を取り上げた、今号の連載記事もどうぞ。

このときビンフィールド氏は、学術雑誌出版はいくつかのOAメガジャーナルと少数の購読型トップジャーナルとに収斂されていくと予想しとったがう。



新任担当者におすすめ

新しくリポジトリ担当になったらご一読を。



第3号
(2010年4月)



第18号
(2011年7月)



第19号
(2011年8月)



第29号
(2012年6月)



第59号
(2014年12月)

- ・ [第3号 \(2010年4月\)](#)
特集2 機関リポジトリ担当者になったら
- ・ [第18号 \(2011年7月\)](#)
特集1 営業活動のススメ
- ・ [第19号 \(2011年8月\)](#)
特集2 コンテンツ可視性向上計画
- ・ [第29号 \(2012年6月\)](#)
特集2 名寄せについて考える
※関連記事として、[第59号 \(2014年12月\)](#) 特集2 ORCID Outreach Meeting in Tokyo もあわせてどうぞ

10大ニュース変遷

各年のIR/OA関連話題を総括している10大ニュース特集。この5年、IR/OAに関わる様々な出来事がありました。

2010年 第11号 (2010年12月)
国立国会図書館、博士論文のデジタル化へ 等

2011年 第24号 (2012年1月)
JUSTICE (大学図書館コンソーシアム連合) 発足／NIIが共用リポジトリ募集開始、各地で説明会／JST、国内初のDOI登録機関JALCの立ち上げを発表 等

2012年 第35号増刊 (2012年12月)
公開件数100万件突破／BOAI10 宣言／フィンチレポート 等

2013年 第47号 (2013年12月)
学位規則改正／日本の研究助成機関OA推奨の動き 等

2014年 第59号 (2014年12月)
機関リポジトリ推進委員会『竹橋宣言』を発表 等

バックナンバーでたどる話題あれこれ

JAIR Cloud

リポジトリを構築するシステムとして、以前はDSpaceが国内第一のシェアを誇っていましたが、現在は共用リポジトリJAIR Cloudを第一候補として検討する機関も多いでしょう。平成24年度から運用を開始したJAIR Cloudは、平成25年度に新規構築機関だけでなく既構築機関の参加も認める方針を示し、データ移行実証実験も実施しました（筑波大学が移行第1号）。

JAIR Cloud採用機関が増え国内のリポジトリシステム基盤の共通化が進むことで、効率性のよい高度なサービスの提供へつながることが期待されます。なお、JAIR Cloudの今後の運用モデルと利用料金に関する説明・懇談会が2015年2～6月にかけて各地で開催予定です（http://www.nii.ac.jp/irp/2015/01/jairo_cloud_2.html）。



第25号
(2012年2月)



第57号
(2014年10月)



第45号
(2013年10月)



第46号増刊
(2013年11月)



第47号
(2013年12月)

Altmetrics

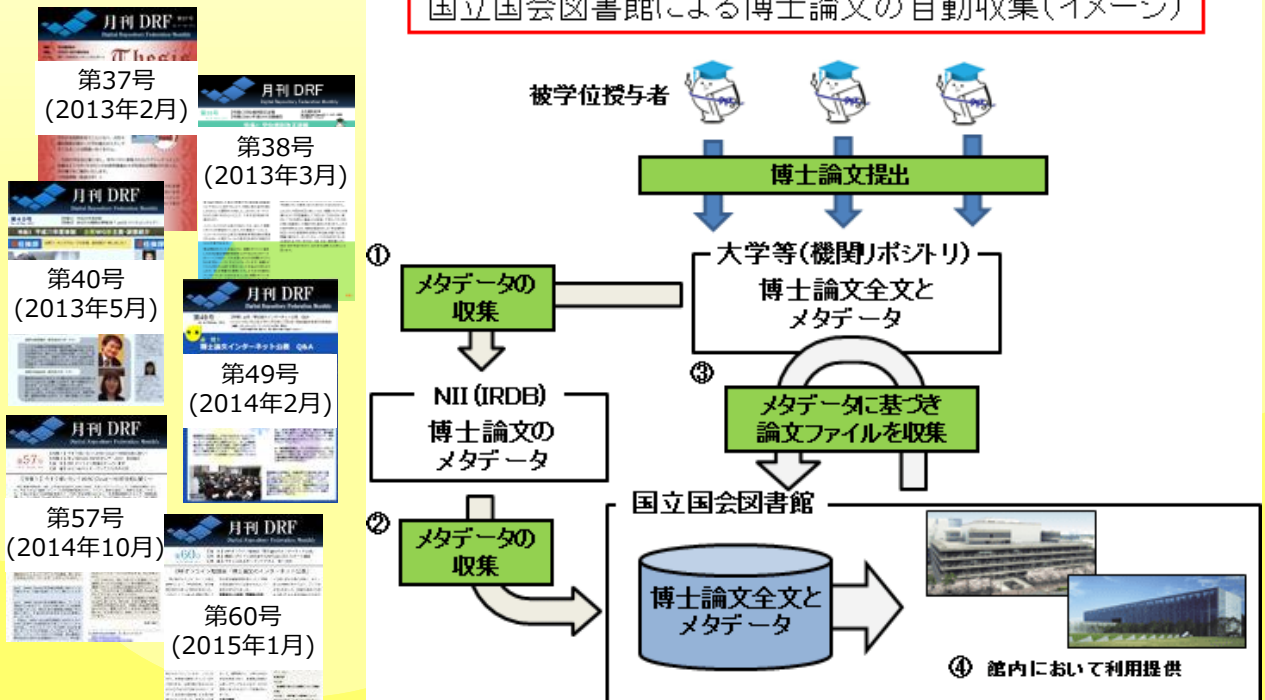
出版モデルだけでなく、研究成果の評価のあり方も変化を続けています。論文単位の新たな評価指標として、ソーシャルメディアにおける反応を利用したAltmetricsが注目され、大手出版社のジャーナルでもAltmetrics数値を表示させるところが相次いでいます。岡山大学が機関リポジトリへ導入した事例も関心を集めました。自機関のリポジトリコンテンツへの注目度を視覚化するツールの一つとして今後普及していくかもしれません。

2010→2015

インフラ化の進む機関リポジトリ

博士論文のインターネット公表義務化は、日本の機関リポジトリに新たなフェーズをもたらしました。学内の学務部門や知財部門等との連携、各研究科との調整、学位申請者のサポート等々、担当者は奮闘の日々が続いているかもしれません。いよいよ平成27年2月2日より、機関リポジトリで公表された博士論文全文の、国立国会図書館による自動収集が開始されます（<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/hakuron/>）。あなたの機関リポジトリ、自動収集してもらうための準備は万全ですか？

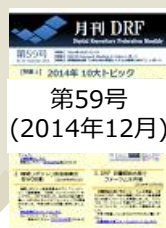
国立国会図書館による博士論文の自動収集(イメージ)



※図は <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/hakuron/index.html> より

これからのリポジトリ

DRFの活動はNIIのCSI事業領域2「機関リポジトリコミュニティの活性化」プロジェクト（平成18年度～）に端を発しています。このCSI委託事業後の新しいスキームとして、連携・協力推進会議下に「機関リポジトリ推進委員会」が2013年7月に設置されました。2013年12月に発表された「大学の知の発信システムの構築に向けて」では、機関リポジトリが今後目指すべき発展の方向性が示されています。



これからも、IR/OAに関する情報を、わかりやすくお届けしていきます。

取り上げてほしいテーマ等、お気軽にご意見をお寄せください！





2014年第2次OAKリポジトリ運営機関協議会 ワークショップレポート

内島秀樹（神戸大学附属図書館）

昨年11月20日にソウルで開催されたオープンアクセス코리아（OAK=Open Access Korea）のワークショップに招聘され参加してきました。OAKは、韓国のKISTI（Korean Institute of Technology and Information）がホストしていたプロジェクトで、研究機関を中心とする機関リポジトリコミュニティ（支援）とオープンアクセスジャーナルの刊行・運用を2つの大きな柱としています。

KISTIのOAK担当スタッフとは2年近く前にNIIで日本のリポジトリコミュニティについてお話する機会がありました。今回、OAKのホスト機関が、KISTIから韓国国立中央図書館に移ったこともあり、今後のリポジトリプロジェクト運営の参考とするため、日本のリポジトリコミュニティの現状について話を聞きたいという要望が中央図書館側にあったとのことです。それが、面識があったKISTIのスタッフによるDRFの推薦に繋がったようです。

ワークショップは、中央図書館で、ほぼ一日をかけて開催されました。「第2次OAKリポジトリ運営機関協議会ワークショップ」と題して、私を含む3人の講演と質疑応答・討議で構成されていました。参加者はOAKに参加している機関（研究所及び大学）の図書館員がメインで、参加者数はおおむね40人程度だったように思います。

最初は、筆者が、「Grass Roots Open Access Movement in Japan – Hita Hita Strategy of Digital Repository Federation」（日本語スピーチ。通訳付き）と題して、この10年あまりのDRFの活動と日本のリポジトリの現状を報告しました。2つ目は、韓国国家記録研究院（The Research Institute for Korean Archives and Records）の研究者、Lee Seungllさんの「参加、共有、協力、連帯、そしてアーカイブ」と題する講演でした。主にWEB2.0と言う観点から、フリーソフトを中心とするソフトウェアの現状と同研究院のアーカイブ事業（AtoM、DSpaceを利用）の紹介が行われました。最後は、国際政策大学院（KDI School）のRyu SinAeさんの「KDI Schoolアーカイブ構築現況」と題する講演で、同大学院のDSpaceによるアーカイブ事業についての報告が行われました。講演後、質疑応答と自由討議がありました。

印象に残ったこととしては、リポジトリコミュニティが日本に比べて小さく、いわゆるグリーン路線を目指す機関リポジトリの運営数も少ないことです。OAKとは別にKERIS（Korea Education and Research Information Service）が学位論文のリポジトリ運営支援を大学向けに行っていると聞いていましたが、機関リポジトリというよりは学位論文のホスティングサービスらしく、各大学がリポジトリを運営してオープンアクセスを積極的に進めているわけではないようでした。翌日には、中央図書館で日本の現状について詳細なヒアリングを受けました。2日間にわたり、欧米とは異なる韓国のオープンアクセスの雰囲気を実感できる貴重な経験でした。



準備中の会場



講演するLee Seungll氏



会場前の筆者

機関リポジトリ 新任担当者 研修会

が開催されます！

日本国内における機関リポジトリの設置機関は増加を続けており、新規構築機関における担当者の育成は喫緊の課題です。一方、既構築機関においても人事異動により運用知識の引継ぎが課題になっています。機関リポジトリ推進委員会では機関リポジトリ関連の研修及び人材育成を重点課題の一つとしており、新規構築機関、既構築機関のそれぞれの担当者を対象とした研修会が以下のとおり開催されます。

参加申込、各会場の講師及びプログラムの詳細については、機関リポジトリ推進委員会のWebサイトでご確認ください。

https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/?page_id=27

主催：機関リポジトリ推進委員会／共催：デジタルリポジトリ連合

東日本会場

日時：平成27年2月20日（金）
10:00～17:45

場所：東北学院大学 土樋キャンパス
8号館 第3・4会議室（宮城県仙台市）

定員：35名

申込締切：平成27年2月16日（月）

西日本会場

日時：平成27年2月27日（金）
10:00～17:30

場所：岡山大学附属図書館 中央図書館
（岡山県岡山市）

定員：35名

申込締切：平成27年2月23日（月）

プログラム：

科目	講師（東日本会場）	講師（西日本会場）
機関リポジトリ概論	鈴木雅子（静岡大学）	鈴木雅子（静岡大学）
研究者と学術研究のプロセス	栃内 新（北海道大学）	栃内 新（北海道大学） 岡本 健（奈良県立大学）
メタデータ	杉山智章（静岡大学）	大園隼彦（岡山大学）
著作権及び著作権譲渡契約	森 一郎（信州大学）	大園岳雄（香川大学）
広報活動とコンテンツ収集	鈴木雅子（静岡大学）	松本侑子（広島大学）
構築・運営事例報告	高野沙弥（田園調布学園大学） 佐藤 恵（東北学院大学）	中谷 昇（鳥取大学） 遠矢厚志（岡山大学）
コンテンツ構築のルーチン	東出善史子（京都大学） 真中孝行（筑波大学）	阿部潤也（東京歯科大学） 橋洋平（金沢大学）
【補講】設立・導入の戦略	三角太郎（千葉大学）	—
【補講】紙資料の電子化	森下映理（奈良女子大学）	—
【補講】学位規則改正と機関リポジトリ	林 和宏（名古屋工業大学）	—
【補講】機関リポジトリのこれから	—	杉田茂樹（千葉大学）

その他、テーマ別の分科会を行います。



PLOS ONEの成長が止まった？

PLOS ONE has stopped growing.

オープンアクセスメガジャーナル（OAMJ）もすっかり定着してきた感があります。2015年3月にはカリフォルニア大学出版局がOAMJ“Collabra”を創刊します[1]。APCの一部を査読者に謝礼として支払う仕組みを設けるとのことで[2]、第3回SPARC Japanセミナー2014で査読者への謝礼の可能性についても議論した[3]身として気になるところです。Elsevierも年内にはOAMJ（と、明言はしていませんが分野を問わないOA誌）を創刊すると発表しており[4]、確実にScopusに収録されるだろうことを考えると、こちらの人気も侮れないことになるかも知れません。

その一方で、OAMJの本家であるPLOS ONEの成長に2014年、ついにストップがかかりました。昨年12月の『情報管理』誌掲載の拙稿でも触れましたが[5]、その後の状況も踏まえて改めて取り上げたいと思います。

創刊以降、PLOS ONEは毎年掲載論文を増やしてきました。2013年には年間の掲載論文数が30,000本を超え、Scopus収録の2013年出版論文の2%近くはPLOS ONEに掲載されたもの、というところでもない状況に至ります。2013年12月には月間掲載論文数が3,000本以上になり、どこまで伸びるか…と思われましたが、そこが月次掲載論文数のピークでした。

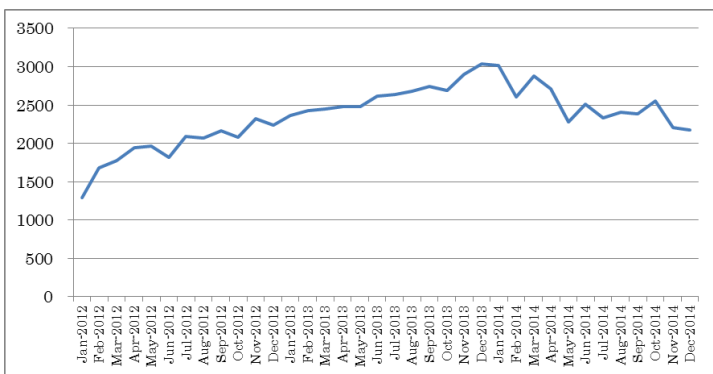


図. PLOS ONEの月次論文数推移 (2012~2014)

図は2012~2014年のPLOS ONEの月次掲載論文数の推移を示したものです（PLOS ONEのサイトよりデータ取得、原著論文とレビュー論文に限定）。2013年12月をピークに、2014年以降は減少傾向に転じていることがわかります。月単位で見た時に前月に比べ論文数が減ることはそれまでもありましたが、2014年5月には前年同月比でも減少傾向になっており、以降2013年の同月より論文数が多かった月はありません。それどころか、11・12月には2012年に比べても月次論文数が少ないほど、論文数が急減しています。2014年全体の掲載論文数も、2013年に比

べ1,400本以上減少しました（それでも30,000本超えは維持していて、他のOAMJの追随を許していないのですが）。

なぜPLOS ONEの掲載論文が減っているのか。理由ははっきりとはわかりません。最初にPLOS ONEの論文数の減少を指摘したPhil Davisはインパクトファクターの低下、競合他誌の増加、各国の研究予算の状況変化等、様々な可能性を挙げていますが[6]、どれも決定打に欠ける気がします。また、2015年1月には掲載論文数がぐんと減り、1月21日時点で180本に満たない論文しか公開されていないのですが、これはPLOSのブログでプラットフォーム改修が理由であると明言されています[7]。同ブログによれば投稿から掲載までにかかる時間の短縮や手間の軽減のためにシステムの改修を進めていて、それに伴って一時的に公開される数が減っている、とのこと。そうなるに気になるのは、昨年11・12月の論文数急減もプラットフォーム改修が影響しているのか、あるいはプラットフォーム改修が必要なほどに投稿数が多すぎて査読・編集の処理が追いつかなくなっていたがための掲載数減だったのか、というあたりなのですが、いずれも今の段階では確かなことはわかりません。年度報告等で明らかにされるのを待ちたいところです。

いずれにせよ、2014年にPLOS ONEの掲載論文数の伸びが止まったのは確かです。このまま成長は頭打ちになるのか、それともプラットフォーム改修後さらなる伸びを見せるのか。元祖OAMJの動向にも、2015年も引き続き注目していく必要がありそうです。

- [1] <http://current.ndl.go.jp/node/27322>
- [2] <http://current.ndl.go.jp/node/27783>
- [3] <http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20141021.html>
- [4] <http://current.ndl.go.jp/node/27781>
- [5] https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/57/9/57_607/_html/-char/ja/
- [6] <http://scholarlykitchen.sspnet.org/2014/06/03/plos-one-output-falls-25-percent/>
- [7] <http://blogs.plos.org/plos/2015/01/publishing-initiatives-plos-improving-author-experience/>

佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科助教。
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」（<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>）
管理人。



■次号予告■【特集】平成26年度企画ワーキンググループ活動報告、【連載】今そこにあるオープンアクセス

■編集後記■

月刊DRFに歴史あり、目指せ10年20年！（西中）

月刊DRFでは、みなさまからのお便りを
お待ちしております。

✉ gekkandrf@gmail.com

読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



Facebook

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>